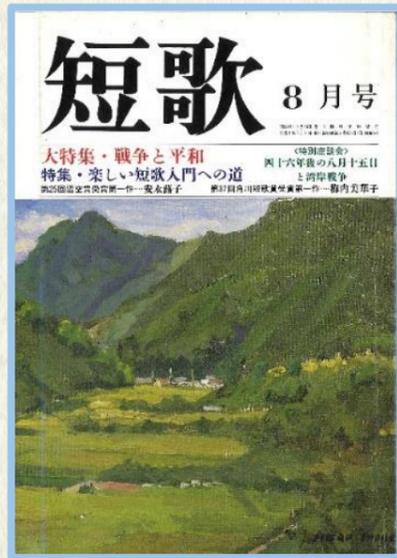


“私の八月十五日”は、1991(平成3)年に民子が戦争体験を振り返ったエッセイです。
150人の生徒たちを連れて、釜石から遠野まで約40kmを歩き続けた日のことを書いています。



雑誌『短歌 3年8月号』 (No.17)
発行:角川学芸出版
(現在は角川文化振興財団)

四十数年前の教え子が、突然訪ねて来た。そして言う。「先生、わたし、まっすぐには生きてこれなかった。」戦争で失ったものの大きさを、改めて知らされる思いがした。

あの八月十五日の数日前、米軍の艦砲射撃で壊滅した釜石の町で、彼女も被災していたのであった。私たちの女学校は町外れだったので危うく残り、病院にされて屋根に赤十字の旗が立った。広い校庭はなきがらの置き場となり、焼き芋のようになって並べ置かれた。もう授業どころでなかった。とりあえず一年生を先ず疎開させることとなり、三組の百五十人、担任の三人で引率して遠野市へ向かった。鉾石を運ぶのに作られたのだという鉄道もとうに爆破されていて、四十軒ほどを歩くしかなかった。教員は傷痍軍人の男子一人、あとは私と和服のもんぺ姿の家政の先生。炎天下汗みどろに歩く私達の上空を敵機が旋回し、機銃掃射を浴びせる。そのたびに木陰に隠れたりしながら仙人峠もこえた。今はもうトンネルですぐ越せる峠も、名前の通り、仙人も鬼も狐狸も棲むという深い山であったが、九十九折りを必死に登って、遠野の女学校に着いたのは夕方であった。その女学校の作法室が私達の落ち着き先、五十畳ほどの和室であった。私一人が犠牲になって死んで、百五十人の生徒が助かるなら死んでもいい、と私は泣きながら先頭を歩いたのであったが、山の町遠野の女学校はひっそりとしていた。(後略)

参考文献

- 『自解100歌選 大西民子集』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『大西民子の歌(現代歌人の世界4)』沢口芙美/著 雁書館 1992年
- 『岩手県の歴史(県史3)』細井計/他・著 山川出版社 1998年
- 『まぼろしは見えなかった』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『無告のうた—歌人・大西民子の生涯—』川村杏平/著 角川学芸出版 2009年
- 『日本史年表 第5版』歴史学研究会/編 岩波書店 2017年
- 『世界史年表 第3版』歴史学研究会/編 岩波書店 2017年
- 『全円の歌人-大西民子論-』沖ななも/著 角川文化振興財団 2020年
- 『短歌 3年8月号』発行:角川学芸出版(現在は角川文化振興財団) 1991年



©仲佳

2021年7月7日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701



歩き続けた日

—民子と戦争—

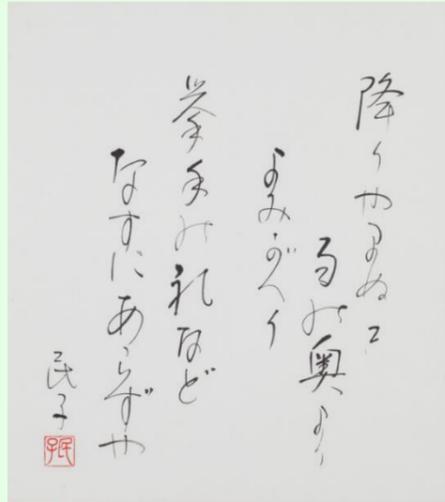
2021年7月7日(水)~9月4日(土)

1	文集	「思ひ出のまゝ」1938(昭和13)年
2	日記	受験の頃の日記 1940(昭和15)年12月26日~1941(昭和16)年1月15日
3	手作り歌集	大西民子手作り歌集『夕ぐれ之歌』奈良女子高等師範学校時代 掲載歌「かの時はもたえ泣きにけれど君もまた 旗をかかげて勇み征く男の子なりしか」
4	手作り歌集	大西民子手作り歌集『はつあきの歌』1943(昭和18)年 掲載歌「君が征きけながくなりて帰ります 日もなしといふいやはてに哭く」
5	教科書	『國語の道—言葉・國語・語法—』 奈良女子高等師範学校教授 木枝増一/著 1942(昭和17)年刊行
6	自筆原稿	「秋篠の人」
7	自筆色紙	「降りやまぬ雨の奥よりよみがへり 拳手の礼などなすにあらずや」
8	自筆原稿	「私のランプ」
9	自筆原稿	「大洋丸」
10	手紙	母・カネ宛ての手紙 1945(昭和20)年頃
11	書籍	遺稿集『光たばねて—大西民子歌集—』1998(平成10)年刊行 短歌新聞社 掲載歌「焼け跡に水道栓はしぶきみつ 艦砲射撃のかの日のごとく」
12	原稿	「遠き夜の記憶のなかに立ちそる 照明弾の下の榎の木」
13	書籍	遺稿集『光たばねて—大西民子歌集—』1998(平成10)年刊行 短歌新聞社 掲載歌「女子のみの生徒を持ちて一人だに 戦にやらぬ幸ひありき」
14	自筆原稿	「クレークに落ちてかへらぬ兵ありき 同級の一人なれば忘れず」
15	自筆原稿	「思はざる会話聞こえて二人とも ガダルカナルの生き残りぞとぞ」
16	自筆原稿	「はやぶさと呼ぶ戦闘機ありにしが かげろふを追ふごときはろけさ」
17	雑誌	『短歌 3年8月号』発行:角川学芸出版(現在は角川文化振興財団) 掲載文“私の八月十五日”

※所蔵はすべて大宮図書館です

1 挙手の礼などなすにあらすや

—学生時代—



自筆色紙「降りやまぬ雨の奥よりよみがへり
挙手の礼などなすにあらすや」(No.7)

大西民子は、戦時中の 1941(昭和 16)年、奈良女子高等師範学校に進学しました。奈良は比較的戦争の影響も少なく、落ち着いた学生生活を送ることができましたが、身近な男性が次々に出征するなど戦争の影は次第に近づいてきました。民子たちの学年は戦争の激化により、1944(昭和 19)年 9 月に 6 ヶ月早く繰り上げ卒業することになります。

学生時代の最後に、民子は好きだった伎芸天ぎげいてんに別れを告げるため秋篠寺あきしのでらを訪れました。そこで偶然、明日出征するという京都大学の学生と出会います。

戦後、再び秋篠寺を訪れた民子は、あの時の彼は再び伎芸天を見ることができたのだろうかと思い、

「降りやまぬ雨の奥よりよみがへり
挙手の礼などなすにあらすや」(No.7)
と詠んでいます。

2 艦砲射撃のかの日のごとく

—教員時代—

卒業後、民子は故郷の岩手に帰り、県立釜石高等女学校の教員となりました。戦況は日に日に悪化していましたが、当時民子まゐが書いていた日記には戦争を詠んだ歌は残っていません。奈良で教えをうけていた、歌人・前川佐美雄まえかわさみおから「決して戦争の歌を作ってはいけない」と言われていたことも影響していたようです。

釜石市は製鉄所があったことから標的となり、1945(昭和 20)年 7 月 14 日の艦砲射撃により、約 2600 発の砲弾が撃ち込まれました。その後、8 月 9 日にも射撃を受けた釜石は焼け野原となります。かろうじて残った釜石高等女学校は病院と化し、一年生 150 人は民子を含めた 3 人の教員が引率して、40 km 離れた遠野とおのへ疎開することになりました。道中しばしば空襲を受けましたが、奇跡的に全員無事にたどり着くことができました。

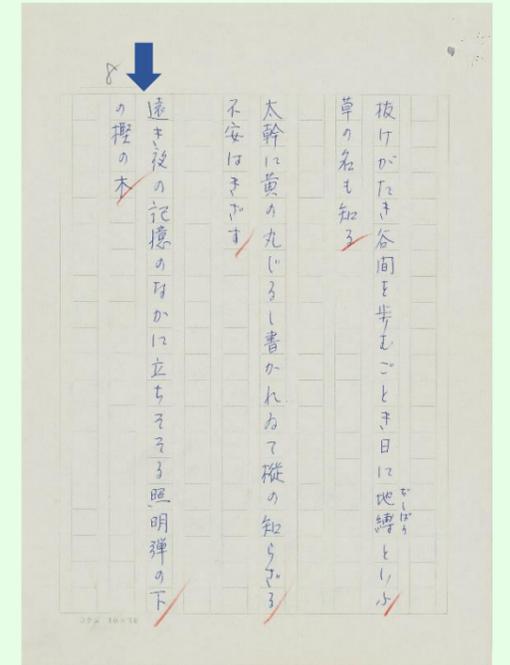
後に民子は

「遠き夜の記憶のなかに立ちそそる
照明弾の下の檜の木」(No.12)

とその時のことを詠んでいます。



写真「釜石高等女学校の教員たち」後列右から3人目が民子
(民子所蔵アルバムより)



自筆原稿「遠き夜の記憶のなかに立ちそそる
照明弾の下の檜の木」(No.12)

3 まっすぐには生きてこれなかった

—戦争を振り返って—

民子は、戦争で亡くなった知り合いも多く、晩年まで犠牲になった人々へ思いを寄せる歌や、戦争を思い起こしての歌を詠んでいます。

「クリークに落ちてかへらぬ兵ありき 同級の一人なれば忘れず」(No.14)

「思はざる会話聞こえて二人とも ガダルカナルの生き残り」とぞ」(No.15)

「はやぶさと呼ぶ戦闘機ありにしが かげろふを追ふごときはろけさ」(No.16)

また、雑誌『短歌 3年8月号』に、「私の八月十五日」と題してエッセイを寄せています。戦時中に民子と一緒に遠野へ疎開した生徒のひとりが、約四十年ぶりに民子を訪ねて来た際に「まっすぐには生きてこれなかった」という言葉を投げかけます。戦争を振り返った民子は、改めて失ったものの大きさを実感するとともに、彼女たちの運命だけではなく自分の運命もまた戦争によってまっすぐではなくなったと書いています。



自筆原稿「はやぶさと呼ぶ戦闘機ありにしが かげろふを追ふごときはろけさ」(No.16)